

シンポジウム：『フィルム』再考 - 逸脱、間隙、窃視

『フィルム』におけるドッペルゲンガー的イメージ

朴夏辰

本作の最後、視線から逃れたいOとそれを追跡するEが対面するシーンは、自分自身という不可避的な知覚を示すとされ、Eをドッペルゲンガーのイメージと重ねる指摘もある。しかし、ではなぜOのようにEの片割れでもなく、知覚から逃れようともしていない夫婦や老婆がEの視点に苦しむのだろうか。本作には他にも、自己を写す鏡、カメラマンのうつる写真、椅子の背もたれにある目のような空洞などをめぐり、他者の視線を恐れ排除するOという基本的形式から逸脱するシーンがある。本発表では、そうした視線とそれに対する反応に注目しつつ、映画作品である本作のドッペルゲンガー的イメージが何を表すのかを考える。

ベケット、エイゼンシュテイン、ヴェルトフ、そして「間隙の理論」

石川太郎

本発表はベケットの『フィルム』を中心に、セルゲイ・エイゼンシュテイン、ジガ・ヴェルトフの映像作品との比較検討を行う。エイゼンシュテインのベケットへの影響関係はこれまでも盛んに論じられてきた。その一方で、ヴェルトフとの関係は、Michael Northが*Machine-Age Comedy* (2009)で初めて指摘するまで問題にされる事は無かった。『フィルム』の時代設定は「1929年頃」とされているが、この頃エイゼンシュテイン、ヴェルトフ共に「間隙の理論」(“a theory of intervals”)が作品創作上の重要な要素の一つだった。興味深い事にベケットも1932年頃執筆の『並には勝る女たちの夢』において「間隙」をベラックワが理想とする書物の重要な一要素として語らせている。そこで、3人に共通する「間隙」の理論化が『フィルム』にどのように応用出来るのかを本発表で考えたい。

ベケット『フィルム』とヒッチコック『裏窓』——不透明なカメラの視線をめぐって

岡室美奈子

本発表では、アルフレッド・ヒッチコックの映画『裏窓』(*Rear Window*, 1954)とベケットの『フィルム』(*Film*, 1965)におけるカメラの視線を比較検討し、ベケットとヒッチコックがカメラの視線をめぐって同様の問題意識を抱いていた可能性について考察する。『裏窓』では、脚の骨折により動けないカメラマンのジェフがカメラのレンズを通して窓から近隣住民を窃視するが、カメラの視線は不穏な動きを示す。ベケットがたとえばヒッチコックの『めまい』(*Vertigo*, 1958)から影響を受けた可能性については既に示唆されているが(Anthony Paraskeva, 2017)、本発表では『フィルム』と『裏窓』に特化して検討する。さらに、ベケットがテレビドラマを「覗き穴の芸術」と呼ぶに至る上でも、ヒッチコックの影響があったのではないかという大胆な仮説も提示してみたい。